

三陸の近景

⑧

「やっぱり、海が好きなんだ」

一度、津波が襲ってきたところに建物を再建すべきか否かの問題は、沿岸部で営みを続けてきた人々にとって切実な問題です。

「二度と同じ目に遭いたくない」「もう商売はしない。まず安心して暮らすことが先だ」。さまざまな声があり、自治体によっても対策は異なりますが、多くの方が元の場所とは違った場所で商売を再開しているのが現状です。

地元の方に案内をいただいて、気仙沼市の小料理店に入ったときの話です。偶然、60代の店主とお



話をすることができました。実はこのお店、すぐそこに海が見える岸壁沿い、津波浸水域に位置しており、当初行政から営業再開を許されなかったとのことでした。どうしてお店をこの場所で再開したのだろうかという疑問が湧きました。

何うと「強引に再開せざるを得ない理由があった」とおっしゃるのです。

行政からは浸水域で営業を再開するには「5年待ってください」と言われたとのこと。しかし、「商売人にとって5年待つと言うことは絶望的なんだ。年配の自分に残された時間は少ない。大切なのは今なんだ」と言って担当者に納得してもらったそうです。

震災直後から行政の方と厳しい交渉を繰り返したという話は迫力があり、大変なご苦労が垣間見られました。

続けて「でもな、やっぱり、海が好きなんだ。津波は怖いけど海から離れて商売はできねえよ」。先ほどまでの厳しい店主の表情から笑みがこぼれたのです。

なぜ、この場所で営業を再開したかったのか、複雑な感情が同居していることがうかがえました。

(金澤 豊)